■エッセイ

対話という方法

――「戦争と暴力の時代」にしないために

岡本　厚
岩波書店前社長

ウクライナでは二年を過ぎても悲惨な戦争が終わらず、パレスチナでも、イスラエルの非道な攻撃の中で、多くの人びとが殺され続けています。犠牲者が出れば復讐心、憎悪が広がり、戦いを止めることが難しくなります。私たちは日々歯がみしながら、いま目の前で行われている戦争を止める手立てを見つけられないままでいます。

そして再び「戦争の時代」が来るのではないか、という不安と恐怖が日本社会にも広がり、それに乗じた政権の「今日のウクライナは明日の東アジアかもしれない」という脅しに煽られ、メディアも国民も、軍拡の道をひた走る日本の姿に手をこまねいているのが現状ではないでしょうか。

いまの状況をどう見たらいいのか、どういう行動を取ったらいいのか――多くの人びとが迷っているように感じます。

対話によって対立を乗り越える

「戦争の時代」が始まるという不安の中で、「対話こそが大事だ、戦争を防ぐ道だ」と言うと、「対話で戦争が防げるのか、いま現に戦争が行われ、あちこちで起きそうなときに、なんて悠長な」という反応を受けることもあります。それは平和運動などをしている近しい人たちからこそ挙げられる声です。

旧東欧出身のある大学研究者は、「ヨーロッパはずっとロシアと対話してきた。しかしロシアの侵攻を止めることは出来なかった」と言いました。

しかしいくら考えても、私には「対話」以外の答えは出てこないのです。

私は、ウクライナ戦争勃発以後、にわかに沸き起こったいわゆる「台湾有事」（台湾をめぐる軍事衝突）は決して起こしてはならないとの思いで、二〇二二年一〇月から二〇二四年二月まで、沖縄を中心に活動した「『台湾有事』を起こさせない・沖縄対話プロジェクト」を呼びかけ、共同代表も務めました。その1年余の活動と成果は、「沖縄対話プロジェクト」のＨＰに掲載されているのでぜひご覧いただきたいですが、私は、その活動を通じて、戦争を防ぐには「対話」しかない、との確信をいよいよ深めるに至りました。

名称からも分かるとおり、このプロジェクトの目玉は「対話」にあります。

二〇二二年一〇月の発足集会のチラシには「対話によって対立を乗り越える、対話で平和の世論を醸成する」と書きました。

またプロジェクトの企画書（二〇二二年九月）には「戦争と暴力の反対語は平和ではなく対話である。平和という言葉は「平和を守るための戦争」「平和を維持するための武力」「正義のための戦争」といった独善的な政策に容易に絡めとられる。対話の必要性を訴え続け、市民自らが対話を実践することで政治指導者に対話を促すことも必要である。」と記してあります。

こうした考えは、プロジェクトの発案者であり実務も担った、私と日本国際ボランティア・センター（ＪＶＣ）元代表の谷山博史さんの二人が原案を書き、呼びかけ人の了解を得たものです。

谷山さんは、アフガニスタンやスーダン、ソマリア、イラク、パレスチナやカンボジアなど、世界の紛争地域で難民支援や民生協力をしてきた方です。彼はまさに長年の紛争現地の経験から、「対話」の重要性を実践的に確信した人です。彼と私は、一九九三年、内戦が終わりつつあったカンボジアのプノンペンで出会いました。

私の方はジャーナリズムと出版活動の中で――つまりやや抽象的、論理的に――「対話」の重要性に

気づいたと言えるでしょう。たとえば、二〇一七年に岩波新書として刊行した暉峻淑子著『対話する社会へ』（岩波新書）は、私に大きな影響を与えた一冊でした。その冒頭はこんな風に書き出されています。「戦争・暴力の反対語は、平和ではなく対話です」「日本人の多くは、戦争に巻き込まれたり、暴力行為によって支配されることがない平穏な生活を、平和だと考えているようです。……しかし他方で平和（平穏な生活）を支えているのは、暴力的衝突にならないように社会の中で対話し続け、対話的態度と、対話的文化を社会に根づかせようと努力している人びとの存在だということに、私も気がつくようになりました。対話のない社会はいつか病み、犠牲者を出し、平和はあるとき、あっけなく崩れてしまう」と。

台湾、上海の識者を招いて

対話プロジェクトは、二〇二三年二月に台湾の識者二人（民進党系、国民党系）を招き、四月には、やはり台湾から、二大党派ではない少数派に属する若い世代の識者三人を招いて、沖縄の識者と対話をしてもらいました。その後、大陸の人の話も聞いてみたいという声がシンポの参加者から挙り、九月には上海から二人の識者を招いて対話しました。必ず対面で（つまりオンラインでなく）行い、シンポの前日には沖縄の戦跡や基地、辺野古などの現場を案内しました。

「対話」という言葉は、私たちの活動だけによるわけでもないでしょうが、あちこちで使われるようになり、いつからか流行（はやり）言葉のようになりました。ただ「対話」とは何か、その条件は何か、議論を深めないと上っ面になり、そのうちに消費されてしまうのではないかという危惧も私は感じるようになりました。

人間は対話によって人間となる

対話は人間にとって、必要不可欠なものです。人間関係とは対話の関係であり、言葉によるコミュニケーションなしには、家族も会社も社会も成り立ちません。ある意味、人間は対話によって人間となるのです。

つまり、対話はどこにでも、日常的にあるのであり、ことさら難しい営みではありません。

対話は、ある意味楽しいものでありますが、一方でそれが今日、とても煩わしいものでもあると感じられているのも事実です。なぜなら、対話は一方通行ではないからです。相手がいて、スムースにコミュニケートできなかったり、混乱したり、反駁されたり、面倒なことが起きるからです。私自身、見知らない人から話しかけられるのは正直面倒だな、と感じます。

最近、孤立した青年や高齢者が半ば自殺のような形で犯罪を犯すことが増えている印象がありますが、もし彼（ほとんど男性）が誰かと対話し、愚痴を聞いてもらったり慰められたり諫められたりしていたら、そのような犯罪を犯すことはなかったかもしれないと思います。昔なら、誰かが（かみさんが、横町のご隠居が、隣の八つぁんが）話を聞いてやったりしていたのではないでしょうか。でも、一見そういう人の話を聞くことは、とても煩わしい。家族においても話しあうことは、煩わしいものになっています。現代における孤独とは、対話の不在ということです。

対話は一方から他方に向けた指示や命令ではありません。だから、対話は権力者とその権力に従う者の間では成り立ちません。会社における上司と部下、学校における教師と生徒（教授と学生）、軍隊における上官と部下などの関係においては対話は成り立たないのです。男権的な家族においては、やはり夫と妻、父親と子の間に対話は成立しないでしょう。

相互に信頼し、理解しあい

対話は双方向であり、対等な立場だから成立します。対話は、相手を屈させるものではないし、「論破」することでもありません。そこからは、何も肯定的・積極的なことは生れません。それはあたかも言葉のやり取りのように見えても、一方的な行為に過ぎません。勝ち負けの世界は、「戦争」「暴力」と同じです。勝ち負けではなく、相互に尊重し、理解しあい、学びあい、変わりあおうとすることが対話です。

対話は「理解できない」と思う相手を「理解しようとする」試みです。国対国であれば外交であり、人対人であれば会話になります。

「理解できない」というのは、たとえば国外においては、北朝鮮（ＤＰＲＫ）の言動が挙げられます。国内においては、たとえば外から入ってきて仕事をしている外国人、移民や難民が挙げられます。その言動ははじめ「理解できない」ように見えます。しかし対話を試みればそれが彼らなりの理屈があることがわかるはずです。その間に言葉がないとき、暴力などのフリクションが起きるのです。

「理解」しようとすることは、「納得」することとは違います。ましてや相手に「迎合」したり「足して二で割る」こととも違います。相手を「理解したい」と思い、相手にも自分を「理解してもらいたい」という営みです。その中から「共通点」を探る試みです。

本当の意味での安全保障を

一方、対話と言いながら、対話でない、対話を持ち出してもそれはポーズであって、実際は対話を拒否している場合もあります。

冒頭の「ヨーロッパはロシアと対話していたのに」という大学の研究者の言葉も、たしかにヨーロッパ諸国、特にドイツなどは対話を重視し、ロシアからエネルギーなどを輸入して関係を深めてきましたが、もう一方でヨーロッパはＮＡＴＯを解体せず、ロシアを敵として、次々に東方拡大していったのも事実です。ロシアは疑心暗鬼となったはずです。Ｗｉｎ―ｗｉｎであった筈の「冷戦の終結」がいつの間にか「西側の勝利」「ロシアの敗北」となり、西側の傲慢と東側の屈辱、報復感情をもたらしたことが、ロシア侵攻の一因とも言われます。

ウクライナ戦争やガザをめぐる戦争の「停戦」提案には、そのようなポーズとしての対話も含まれているでしょう。北朝鮮の核開発をめぐる20年にも及ぶ協議の不調も、北の不誠実ばかりが原因なのかどうか、私は大いに疑っています。そこには相互に尊重するという精神が欠けていたのではないでしょうか。

米ソ冷戦の時代、核軍拡競争が激化し、お互いへの敵視も強く、緊張が続きましたが、その一方で、常に米ソ間には対話の仕組みを作りだそうとする努力がありました。国連の場もあり、二国間の協議もありました。だからこそ、幾度も瀬戸際までいったけれど、戦争は起らなかった。少なくとも、相手の意図を読み違えるところから始まる戦争にはなりませんでした。今は共に亡きレーガンとゴルバチョフの笑顔と握手の対話の情景を、私は懐かしく思い出します。そこにはまだお互いへの尊重、いたわりの精神がありました。いま緊張が高まる朝鮮半島でも、四半世紀前、韓国の金大中大統領と北朝鮮の金正日総書記が抱きしめ合う姿もあったではないですか。

もし対話が有効でないとすれば、残るのはお互いへの不信感と抑止力の名のもとの軍事の強化以外に道はなくなってしまいます。

軍備を増強し安心を得たとこちらが思っているときは、劣勢になった相手が不安になり恐怖を覚えているときです。相手の不安や恐怖を和らげること（安心供与）が本当の意味での安全保障なのです。冷戦を解体に導いたのは、この「共通の安全保障」という考え方に他なりません。

戦争と虐殺の日々にあっても

パレスチナで戦争が始まった直後、朝日新聞に掲載されたニコラス・クリストフのコラムは示唆に富みます（二〇二三年一一月二二日、ＮＹタイムス一一月八日電子版）。コラムのタイトルは「『対話しかない』 平和願う歩み」。クリストフはイスラエル人とパレスチナ人を結びつけるためにテルアビブで活動する市民団体について書いています。筆者は初めは懐疑的だったのですが、紛争で愛する家族を失った人たちで作るイスラエルとパレスチナの共同非営利団体のメンバーと話す中で彼らに敬意と感謝の念を抱きます。いまの戦争状態ではすぐに成果を出せるとは思えないけれど「でも、いずれ状況は変わるでしょう。他に選択肢はありません」とＮＰＯメンバーは言うのです。戦争と虐殺の絶望的な日々にあっても、「対話」しか選択肢はないというのです。私は心から共感しました。

始まってしまった戦争を止めるのが対話しかないなら、戦争を始めないために、対話をする以外に何があるでしょうか。

「核開発を推し進める北朝鮮」「海洋進出を進める中国」――これらはメディアの常套文句です。これだけを聞かされていれば、不安と恐怖に身構えて、

「軍事費倍増もやむを得ないよね」「反撃能力もなければ危ないよね」となるでしょう。相手が「理解できない」と感じたなら、それが戦争への道の第一歩です。第二次世界大戦では、日本は敵を「鬼畜」と呼び、米国は日本を「獣」と見なしました。「鬼畜」であり「獣」であるから、「彼ら」は理解できないしどんな攻撃をしてもよい、それが原爆でも、となるのです。

個々の実践から

対話は戦争を回避する方法ですが、それを働きかける市民の運動においても実行され、貫かれるべき方法であると私は考えます。

これまでは、政党であれ市民運動であれ、「正しいこと」を主張していけば、少数派（マイノリティ）はやがて多数派（マジョリティ）になり、権力を変え政策を変えることができると考えてきました。これは民主主義の原則であり、それ自体は間違っていません。しかし、自分が「正しい」と思う心の奥に、相手は「正しいことをわかっていない」「本当のことを知らない」という思いも含まれていたのではないでしょうか。だから、常に悪いのは「正しいことをわかっていない」相手であり、あるいは「本当のことを知らない」大衆、ということになってしまいがちなのです。

対話の場合、そうは考えません。自分も相手を「分かっていない」かもしれないと思うのです。悪いのは相手だけでなく、自分の中にも問題があるのかもしれないと思うのです。対等、ということはそういうことです。

いまや世界中で対立と分断が激しくなっています。米国でも、民主党支持者と共和党支持者の間で内戦が始まるのではないかというくらい溝は深くなり、韓国でも保守と進歩の対立は抜き差しならないほどになっています。その傾向は日本にもあり、沖縄にもあります。政治的意見の違いだけではなく、世代、性別などによる違いも露わになってきました。ＳＮＳというメディアの特質が対立を助長しているのは明らかです。ここでも「理解できない」「嫌な奴」と思う相手とは、メディアを通じてではなくリアルに対話するしかないと思うのです。

つまり戦争を防ぐ道は、実は日常に、自分たちのすぐ横にあるということではないでしょうか。「理解できない」と思っている保守政治家や宗教団体のメンバーと対話を模索し、経験や知識の足りない若い世代と話すこと（くれぐれもＳＮＳなどを通じてではなく、また一方的に教えようなどとせずに！）、それが遠回りでも平和につながるのではないでしょうか。

私自身、こう言いつつ、実践出来ているとはとてもいえません。むしろ対話は不得意な人間です。でも、対話しようと努力したいとは思うのです。対話は誰にでも出来ることであり、逆に言えば、誰かがやればいいというものではありません。

戦争を防ぐ道―日常の対話を さざ波のように国内外に広げていく

二〇一四年、菅原文太さんは沖縄で次のようにスピーチしました。「政治の役割は二つあります。一つは国民を飢えさせないこと、もう一つは、これが最も大事です。絶対に戦争をしないこと」。私も大いに共感します。日本国憲法の前文には、「日本国民は……政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し」と書かれています。戦争が忍び寄ってきているように見えるいま、国民は、政府に対して「再び戦争を起こさせない」よう、監視し、真剣な外交、誠実な対話を求めなければならないのではないでしょうか。そして私たち自身は、その日常において、対話のさざ波のように国内外に広げていく努力をしていきましょう。

岡本厚（おかもと　あつし）さん
１９５４年生れ、１９７７年早稲田大学卒業後、岩波書店入社。月刊誌「世界」に配属、政治、教育、安保問題などを担当、’96年～２０１２年同誌編集長、’13年～’21年岩波書店社長。以後、ジャーナリストとして安保、日韓関係、「台湾有事」問題などに発言を続ける。